

## はじめに

「おい辻元、祖国に帰れ。ぶっ殺してやる」

「この紙は新型コロナウイルスです。たぶん感染したと思います。ソーリーソーリー、サクラサクラと大声を出して、あの世へ行ってください」

「これ以上、国益に尽くす安倍総理の邪魔をするのはやめたまえ」

こうした脅迫ともとれる文が送られてくるのは、私にとって珍しいことではありません。中には、血らしきものが付着した綿やカッターの刃が入っていたこともありました。

私はこれまで、インターネット上でデマを流され続けてきました。脅迫文の中身もそうしたデマを真に受けたものです。

自分と意見が違う人を「敵」と見なして攻撃する。それによって社会が分断されていく。安倍政権になってから、この深刻な現象が加速しているように思います。

私は総理大臣からも議会でヤジ（罵声）を浴びせられる存在です。それも一回だけではありません。

時には心が折れそうになります。

それでも、私は発言を止めません。

それは、なぜか？

こんな時代だからこそ、立法府の国会議員が、行政を司る権力者を厳しくチェックしなければならぬ、そうしないと三権分立が壊される、と考えているからです。

脅迫を受けるたびに、心が痛み怒りが湧いてきます。しかしある意味、私にとって脅迫よりも辛いひと言があります。

「野党がだらしなからなあ」と言われることです。

そして「自分たちが声をあげても、どうせ変わらないでしょ」と無気力になって政治に絶望し、諦めてしまう人たちの姿を見ることが一番苦しいのです。そのたびに、今の政治に対するシニカルな風潮をつくっている責任が私にもある、とこの言葉を噛みしめています。

テレビのワイドショーやネットニュースなどでは、センセーショナルな場面だけが繰り返し報道され、「また野党は審議拒否をしている」「大事なことがあるのにケンカしている場合か」などと、どっちもどっちのうんざり感が増幅される傾向があります。大半の人たちは、切り取

られたワンシーンだけを報道で知るとというのが現状です。インターネットのフェイクニュースで、真実が捻じ曲げられて伝えられることすらあります。

なぜ、野党は審議拒否をするのか？

そこには相応の理由が、それも政治の局面を変えていくための大きく深い理由があるのです。

なぜ、平気でウソの答弁をする官僚が出世するのか。

なぜ、疑惑にまみれた総理大臣を辞めさせられないのか。

NGOスタッフだった私が、国会という「異業種」に飛び込んでから四半世紀。文化もルールも異なる政治の現場で、悪戦苦闘を続けています。この間ずっと、どうすれば政治の一見不可思議な意思決定プロセスや人間同士がぶつかり合う生々しい実態を知ってもらえるのだろうか、伝える方法を模索してきました。

どうして、そんな結論になったのか？ 誰が、どんな思いで、どんな行動をしたのか？ 多くの人々にはなかなか伝えられません。

野党の国会戦術には限界があります。もともと議員数は少ないのですから、採決になったら結果は見えています。しかしそれでも国会には各種のルールがあります。ルールが遵守された

のか。そしてルールが破られたらどうなるのか。多勢に無勢の「逆境」の中で、野党はどんな手段を用い、結果にどんな影響を与えたのか。

それを知ってもらえればもつと客観的に政治をジャッジしてもらえるのではないかと私は考えました。

「政治って、こんなふうに動いているのか」

「結果だけでなく、そこに至るプロセスに関心を持ってみよう」

「政治って、捨てたものじゃないな」

一人でも多くの人にこう思ってもらえることが「政治を変えてみよう」という力につながるのではないかしら。

そんな思いで本書を執筆している最中、予期せぬことが起こりました。政治を変える新しい動きが芽生えたのです。

「ツイッターデモ」です。

「#検察庁法改正に抗議します」という一人の投稿が拡散され、瞬く間に投稿が四七〇万件へと広がっていきました。著名な芸能人や文化人たちも声をあげました。

検察は、総理大臣をも逮捕できる唯一の機関です。その検察の人事に、時の政権が介入できるように変えようとしているのではないか？ そんな疑問が一気に広がったのです。新型コロナウイルスの蔓延で、多くの人が命や暮らしや仕事の不安と向き合っている渦中のことでした。いつかは世論に火がつくときがくると信じて、私たちは法案の矛盾点や答弁のウソを追及します。「時間稼ぎ」と揶揄されることに耐えながら、国民が立ち止まって考える「時間を生み出そう」とするのです。

検察庁法改正でも、それまでの数か月にわたる国会での論戦がなければ、政府はすんなりと「官邸の守護神」といわれる人を検察トップに据えたでしょう。

一人ひとりがささやかな勇気を出してあげた声と野党の追及がシンクロすることで、権力も無視できないうねりが生まれ、政治を動かすことができたのです。

これこそが、政治を変える力です。

私は、二〇一七年一〇月から二〇一九年九月まで、野党の国会運営の責任者〓国会対策委員長（国対委員長）を務めました。国会の中と外をつないで「政治を動かす力」を生み出すために奔走してきました。まさに「七転八倒、七転八起」の日々でした。

本書は、その間の政治のトピックスを事例に、私が経験した国会での政策決定や疑惑解明のプロセスをまとめたものです。

「わずか二年で国対をわかったふうに書くな」「国対の話は墓場まで持つて行け」という声が「政治のプロ」たちから聞こえてきそうです。そんなご批判やお叱りは覚悟の上で、あえて世に問うことにしました。

与野党とも第一党の女性の国対委員長は初めてです。私の「初めての国対」経験は技術も未熟で、判断も甘いことが多々あったかもしれませんが。しかし、そんな私だからこそ、「与野党も野党もポジショントークをしているだけじゃないか」というシニカルな言説は国会を無力化させたい勢力の思うつぼなのだ、と伝えることができると思うのです。

「明日の天気は変えられなくても、明日の政治は変えられる」という思いを一人でも多くの人たちと共有するために。

そして、私たちが「分断」ではなく、「共感」でつながる新しい社会を生み出せるように。